

ちょっと ブレイクしませんか?

スティング

[1973年 米国]

第 16 回

イソップ寓話集に「蟻」と題する小話がある。「今の蟻は昔は人間であった。農業に勤しむのはよいが、自分の汗の結晶に満足せず、他人のものにまで羨望の眼を向け、隣人の収穫をくすね続けた。ゼウスがその貪欲に腹をたて、姿を変えて、蟻と呼ばれる生物生きものにしてしまった。彼は姿を変えても、心ばえは変わらなかった。だから今も畠を歩きまわって、他人の小麦や大麦を集めては自分のために貯えている」

40年近く前の映画に「スティング」(1973年 米国)がある。1936年。マフィアの一員から金を奪った詐欺師ルーサーが殺され、組織の手は一味の1人フッカーにも伸びていた。ルーサーの復讐を誓ってフッカーはシカゴのゴンドルフを訪ねた。だが頼みとするゴンドルフは、ギャング同志の争いでFBIから追われ、今では売春宿に身を隠している有り様だった。しかし、親友の死を知ったゴンドルフは、相手がロネガンと聞き目を輝かせた。その日から2人は、ロネガンがポーカーと競馬に眼がないことを調べ上げた。ゴンドルフは急ぎ昔の仲間を集め、下町にインチキノミ屋を構えた。列車の車中で、ロネガンはいつもポーカー賭博をやると聞いたゴンドルフは、その仲間入りをし、いかさまでロネガンを大きくへこませた。しかも、ロネガンのサイフはゴンドルフの情婦にすり取られていたために負け金を払うことも出来ない始末だった。翌日、ロネガンの宿にゴンドルフの勝金を取りにきたフッカーは、ゴンドルフのポーカーがイカサマであることを告げ、頭にきたロネガンに負け金の何十倍も稼げる話を持ち込んだ。「ゴンドルフの経営するノミ屋に電送されてくる競馬中継は、電報局の局長と組んで数分遅れで放送していて、既に結果が出た馬券を買えるので、ゴンドルフを破産させるのは容易い」と説得した。

だが、彼らの活発な動きはFBIの目にとまり始めていた。ロネガンはフッカーの持ち込んだ話が信用できるのかどうか、あらゆる手を打ってためしていた。遂、50万ドルの大金を注ぎ込むことにしたロネガンは自らノミ屋に向向く。ロネガンが50万ドル注ぎ込んだレースが始まった瞬間、ノミ屋にFBIが踏み込む。ゴンドルフは自分を裏切ったフッカーを射殺し、そして自らもFBIの銃弾に倒れた。店内は大騒ぎになり、ロネガンはFBIに連行された。だがこれは、FBIまでふくめて皆フェイクでゴンドルフの筋書通りだった。

中小建設業界の年金を2,000億円も集め、8千万円もの年俸と数億円の配当金を得ていたAIJ浅川社長は「蟻」の数万倍のバクリ屋だ。陋劣な本性の人はどんなに懲らしめられても生き方を変えないだろう。AIJの被害者は、お金を取り返す目処がなく途方に暮れている。お蔭でうつ病が再発した経営者もいる。

精神科医・映画評論家

かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学
大学院産業戦略工学専攻教授

